

2024 年度 商工系資格評価型選抜 小論文問題

次の文章を読み、問いに答えなさい。

なぜ、私たちは自らの無知の深さを認識できないのだろうか。なぜ実際はまるで違うのに、物事を深く理解しており、すべてを理解できるような体系的知識を持ち合わせていると思うのか。なぜ私たちは知識の錯覚のなかに生きているのか。

この錯覚が私たちの思考を支配する理由を理解するには、そもそもなぜ私たちは思考するかを考えるのがいいだろう。

その目的とは「行動」だ。思考は、有効な行動をとる能力の延長として進化した。目的を達成するために必要なことを、よりの確にできるようになるために進化した。

ただ私たちの知性は、個別のモノや状況について詳細な情報を得るようにはできていない。新たなモノや状況に対応できるように、経験から学び、一般化するようにできている。新たな状況で行動するためには、個別具体的な詳細情報ではなく、世界がどのような仕組みで動くのか、そのおおもとにある規則性だけを理解しておけばいい。

ところで、私たちは知識のコミュニティに生きている。つまり、私たちは他の人々の頭のなかにある膨大な量の知識にアクセスできる。とはいえ、誰も一人で、すべての分野、あるいは一つの分野のすべての側面に精通する者はいなかったはずだ。なんでもできる人というのは存在しない。

だから人は協力するのだ。技術や知識を簡単に共有できるのは、社会集団で暮らすことの大きなメリットだ。

誰にとっても知識を表現するのは難しい。自分が知らないことはこれです、と特定するようなかたちで知識を表現するのは、なお難しい。知識のコミュニティに参加するには、すなわち自分の頭には知識の一部しか存在しない世界で生きていくためには、自分の記憶のなかに保管されていないものも含めてどのような情報が入手可能か知っている必要がある。どのような情報が入手可能か把握するのは、至難の^{わざ}業だ。自分の頭のなかにあるものと、外にあるものの境界はシームレスでなければならない。私たちの知性は必然的に、自らの脳に入っている情報と、外部環境に存在する情報とを連続体として扱うような設計になっている。人間はときとして自分がどれだけモノを知らないかを過小評価するが、それでも全体として驚くほどうまくやっている。それができるのは進化プロセスのもたらした最高の結果の一つと言える。

ここまでで、知識の錯覚の起源をご理解いただけたと思う。思考の性質として、入手できる知識はそれが自らの脳の内側にあるが外側にあるが、シームレスに活用するようにできている。私たちが知識の錯覚のなかに生きているのは、自らの頭の内と外にある知識のあいだに明確な線引きができないためだ。それができないのは、そもそも明確な線など存在しないためである。だから自分が知らないことを知らない、ということが往々にしてある。

出典：スティーブン・スローマン&フィリップ・ファーンバック著 土方奈美訳

『知ってるつもり 無知の科学』、早川書房、2018 年。出題のため一部改変。

問 1 本文を要約しなさい。（300 字以内）

問 2 筆者の意見に対して、あなたは何を思いましたか。具体的な事例を挙げるなどして、あなたの考えを述べなさい。（500 字以内）

以 上